

# 英語授業におけるスピーチ原稿作成への機械翻訳活用の実践報告

教養教育センター助教 中野 優子

## 1. はじめに

本稿は、拙著「大学教養英語科目における機械翻訳活動の導入」(中野, 2024) の続編であり、2025年度全国英語教育学会第50回研究大会における発表内容に加筆したものである。前稿では、大学英語授業における機械翻訳(以下、MT)利用の現状を整理し、MTを授業内活動として導入する際の教育的意義と課題を報告した。本稿では、その後の実践として、スピーチ原稿作成へのMT活用を試みた授業実践を報告する。

今日、多くの学生が日常的にMTを使用しており、教師の管理外でその利用が進んでいるのが実情である。特にスピーチ活動では、学生がMTに全面的に依存して原稿を作成する例も見られる。その結果、学習者の英語運用力の向上にどのような影響が生じるのか、教師がどのように関与すべきかという問題が生じている。こうした現状を踏まえ、筆者はMTを禁止するのではなく、教育的な指導の下で積極的に活用させるという立場を取っている。

授業実践の舞台となったのは、筆者が担当する大学教養英語科目である。本授業では例年、学生が1分間の英語スピーチを行う「1分間スピーチ大会」を実施しており、スピーチ原稿作成は重要な学習プロセスとなっている。2024年度は、このスピーチ原稿作成過程にMTの活用を導入し、さらに生成AIツールであるChatGPTを併用した学習支援も試みた。本稿では、学生の実際の使用実態、教師による指導方略、そして学習者意識の変化を報告し、MTおよび生成AI活用の教育的可能性を考察することを目的とする。

## 2. 先行研究

### 2.1 小田 (2024)

本研究の出発点となったのは、小田の一連の実践研究である。小田は東京経済大学において筆者と同様に必修英語を担当し、2019年以降、積極的に機械翻訳(MT)を授業に導入してきた。筆者は、小田(2022)が提唱する「学生に自らが理解できる翻訳結果だけを採用させるなどのルールを設ければ、機械翻訳と教養英語は共存できる」という考えに賛同し、本研究を開始したという経緯があることを最初に述べておきたい。

最新の小田(2024)は、生成AIの登場により、大学における一般教養英語教育がより実用志向へと向かう可能性を論じている。直接的に本稿の実践内容と関わるわけではないが、教養

英語教育の方向性を考えるうえで重要な示唆を与える報告であるため、ここで取り上げたい。小田は、企業・大学・大学生の関係性を踏まえ、「経済活動と密接に結びつく大学の教養英語教育では、実用志向の後退は起こりにくい」と指摘する。

具体的には、企業が国際競争力を維持するために英語力向上を重視している点、そして大学の英語教育方針は、英語科目を必修とするか選択とするかという制度設計に大きく依存している点を挙げている。さらに、少子化の影響により多くの大学が国際系学科を新設しており、英語が重視される傾向が強まっている現状を踏まえ、「AIの発展を理由に英語を選択科目化する大学が現れるだろうか」と問いかけている。

小田（2023）の学生アンケート（n=271）によると、「英語カリキュラムに望むこと」として「英語の科目を増やしてほしい」が19.6%、「必修科目を減らしてほしい」が2.6%、「必修をなくして選択科目にしてほしい」が11.1%であった。小田は、英語の必修化に否定的な学生が少数にとどまったことに注目し、英語教育の実用的価値が依然として支持されていると結論づけている。

また、小田（2024）の調査では、「AIの発達により英語を勉強しなくてもよいと思う」と回答した学生は8.6%にすぎず、「就職や仕事、転職のために英語を勉強しておいた方がよいと思う」（55.5%）、「英語が話せるようになりたいので、もっと練習したい」（35.5%）とする回答が大半を占めた。小田は、AIの発展にもかかわらず英語学習意欲が維持されている背景には、経済的要因があると指摘している。また、「一般的な学生の関心はTOEICや英会話などの実用英語に集中しており、教養的内容への関心は高くない」と述べている。

これらの指摘は、本学にも共通して見られる傾向であり、学生の関心は資格試験や就職に直結する実用的英語力に向かう傾向が強い。小田の報告は、AI時代における教養英語教育の意義を再考する上で、重要な問題提起であるといえる。

## 2.2 近藤ほか（2025）

近藤ほか（2025）は、立命館大学のプロジェクト発信型英語プログラム（PEP）において、2022年度より機械翻訳を全面的に導入した実践を報告している。MTや生成AIの教育利用に関して議論が十分に進んでいない現状の中で、この取り組みは極めて先進的な事例といえる。PEPで実施された活動では、「学生はまず日本語で文章を書き、それを自力で英文にする。次に、日本語文を機械翻訳で英文に翻訳する。最後に機械翻訳の英文を「参考対象」としながら、自力で書いた英文を修正する」という手順が採用されている。活動中には、辞書の併用を推奨し、学生には「ツールは英語力向上のために活用すること」「英語を自分のものにする」「誇りを持って発信すること」という3点を明示したと報告している。

フィードバック方法としては、筆者の実践と同様に全体フィードバックを中心に据え、授業中に教師が巡回しながら適宜指導を行っている。また、学生の誤りで最も多く見られたのは、三単現のsや名詞の複数形の脱落など基本的な単語レベルのミスであり、自己修正可能な範囲であったという。この結果は、筆者が前年度に報告した内容とも一致する。

さらに近藤は、MT導入の対象学年についても言及しており、学生の基礎力やタスクの性質を踏まえて導入時期を慎重に判断する必要性を指摘している。筆者も同様に、基礎知識が十分に定着していない1年生ではなく、一定の英語力を備えた2年生以降にMTを導入することが望ましいと考えている。学生自身で間違いを見つけ、修正できないのであれば、活動自体の目的が達成できないからである。

### 3. 1 分間スピーチ大会

筆者の担当する英語クラスでは、すべての学年・クラスにおいて、各セメスター中盤から終盤にかけて「1分間スピーチ大会」を実施している。具体的には、クラス人数によってであるが、第10週頃から開始し、第14週までをリーグ戦、第15週を決勝戦として構成している。各リーグ戦は7～9名ほどで、各リーグの優勝者が最終週の決勝に進出する。スピーチの評価については、成績の中に組み込まれているため、教師は個別に点数をつけるが、スピーチ大会でのリーグ戦の優勝者、最優秀賞は学生らの投票によって決定される。これにより、学生が互いの発表を主体的に評価し合う環境を形成している。

スピーチの指導において筆者は、この大会を単なる発表の場ではなく、自己アピールの場であると学生に伝えている。自分のスピーチを聞いたクラスメイトが『面白そうな人だ』『友達になりたい』と思える発表を目指せばよいのである。そのため、学生には、聴衆に伝わる表現、聞き取りやすい語彙やリズムの工夫などを促している。

さらに、他者のスピーチにも積極的に興味を持たせるため、発表ごとに「コメントシート」を配布し、各発表者に対する感想や評価を記入させている。このため、学生は自分以外の発表においても、発表者が何を言っているのかを理解しなければならない。これにより、学生は、相手に伝わるように自身のスピーチ原稿を工夫する必要性が出てくるのである。例えば、学生レベルに合わせた語彙、聞き取りやすい（自分が発声しやすい）語彙を選ぶなどである。

また、この活動により、学生は他者の発表内容を正確に理解しようとする姿勢が生まれ、リスニング力の向上にもつながっている。また、コメントシートを通じて得られる他者からの反応は、自身のスピーチ原稿を改善する際の有効なフィードバックとなる。

以上、1分間スピーチ大会は、学生の英語運用能力を高めるとともに、相互理解を促す教育的効果をもつ活動であるといえる。発表と聴取の双方を経験することで、学生は英語による自

己表現力と他者理解力をバランスよく養うことができる。このような活動は、英語教育における「コミュニケーション能力の育成」という目標に資する有効な実践である。つまり、1分間スピーチ大会は、学生にとって単なる英語発表の機会ではなく、自らの言葉で人に伝える喜びや、他者の考えを理解する大切さを実感できる学習活動となっている。

#### 4. 機械翻訳 (MT) 実験について

本活動は、2024年度後期の7～8週目の2コマを使って実施した。対象は2年生3クラス(dレベル)である。7週目には、なぜMT(機械翻訳)を授業で扱うのかを説明した上で、MTと効果的に併用できる学習補助ツールとして、オンライン辞書アプリ、オンライン英会話サイト(DMM英会話「なんてuKnow?」)、Google USA/UK、Grammarlyなどを紹介した。その後、学生にGoogle翻訳を用いた実験を、次の2通りの方法で比較させた。

初回で肝心なことは、学生が実験を始める前にMTについての詳細な説明をしないことである。教師が余計な情報を与えてしまうと、学生自身の気づきに影響を及ぼすおそれがあるためである。本実験の意義は、学生が自ら体験を通じて気づきを得ることにある。

その後、学生にGoogle翻訳を用いた実験を、次の2通りの方法で比較させた。1つ目は、自力で英文を作成し(辞書の使用は可)、それをGoogle翻訳にかけて日本語訳を確認する方法である。MTの出した日本語訳が自分の意図と一致しているかを確認し、必要に応じて他のツールを併用しながら修正を加えていく。Google翻訳の英語⇄日本語を繰り返しながら最終版を完成させるプロセスを体験させた。

2つ目は、日本語文を作成し、それをそのままGoogle翻訳にかける方法である。こちらも同様に、出力された英文を自分で見直し、他ツールを併用しながら修正して最終版を完成させた。いずれの方法でも、最終版に至るまでの過程を明示し、気づきや学びをレポートにまとめて提出させた。修正箇所には下線を引かせ、どのように修正したのかが分かるようにした。

評価においては、最終版の英文の完成度ではなく、活動過程における学びの深さを重視する旨を明示した。翌週には、学生のレポートから共通して見られた誤りや修正例を抜粋し、PPTにまとめて、全体共有を行った。レポートについては、別添資料を参照頂きたい。

なお、本実践の時期設定について補足する。前年度はMT活動を14～15週目に実施したが、MTが生成した英文を修正せずそのまま発表する学生が多く、発音困難な語彙や、主語の混乱(「I」にもかかわらず「We」や「You」などを使用するなど)が多く見られた。こうした課題を踏まえ、本年度はスピーチ大会に向けた原稿作成支援として、より早い段階(7～8週目)でMT活動を導入したのであった。

また、授業最終週(15週目)のスピーチ大会優勝決定戦後には、再度MT講義を実施し、授

業のまとめとしてChatGPTをはじめとする生成AIの英語学習活用について紹介した。事後アンケートでは、「MT実験がスピーチ原稿作成にどの程度役立ったか」に加え、「生成AIへの関心や活用意向」についても調査した。

結果として、学生のスピーチ原稿の質、発表時の発音・伝達力ともに明確な改善が見られた。この点は、MT活動の教育的効果を示す重要な成果であった。

以上のようなMT活動の実践を踏まえ、次節ではその教育的効果について、学生アンケートの結果をもとに考察する。

## 5. アンケート

アンケートは2種類実施した。1つ目はMT活動翌週（全体フィードバック後）に実施したもので、前年度結果との比較を行った。2つ目は授業最終日のスピーチ大会後に実施したものであり、こちらは新規調査として分析した。

英語を習得したい気持ちはあるか。

	とてもある	ややある	どちらともいえない	あまりない	まったくない
2年生（大）	14 (37.8%)	18 (48.6%)	2 (5.4%)	3 (8.1%)	0
2年生（小）	5 (83.3%)	1 (16.7%)	0	0	0

### 5.1 MT実験に関するアンケート結果

#### 1. これまでに機械翻訳を使ったことがあるか。

全員が「はい」と回答した。用途は「英作文」「和訳」が大半を占め、「辞書機能」や「外国人との会話」は少数であった。これにより、前期スピーチ原稿作成にMTを既に使用していたことが示唆される。前年度も同様に全員が「はい」と回答している。

【表1】 これまでに機械翻訳を使ったことがあるか。

	毎回	頻繁に	時々	全然ない
2年生（大）	11 (29.7%)	21 (56.8%)	5 (13.5%)	0
2年生（小）	1 (16.7%)	2 (33.3%)	3 (50.0%)	0

クラス	毎回	頻繁に	時々	初めて
経営／工学（31名）	1 (3.2%)	15 (48.4%)	15 (48.4%)	0
地域コミュニティー／政策デザイン（16名）	0	12 (75.0%)	4 (25.0%)	0
データサイエンス／電気電子（20名・再履修クラス）	1 (5.0%)	10 (50.0%)	9 (45.0%)	0

## 2. 機械翻訳を使うことに後ろめたさや罪悪感があったか。

ほとんどの学生が「いいえ」と回答した。前年度は「多少ある」と回答した学生が多数であったことから、MT使用への心理的抵抗が年々低下していることが分かる。時代変化を反映した結果といえる。

【表2】 機械翻訳を使うことに後ろめたさや罪悪感があったか。

	とてもあった	ややあった	どちらともいえない	あまりない	まったくない
2年生（大）	2（5.4%）	10（27.0%）	2（5.4%）	15（40.5%）	8（21.6%）
2年生（小）	2（33.3%）	2（33.3%）	0	1（16.7%）	1（16.7%）

クラス	はい	いいえ
経営／工学（31名）	5（16.1%）	26（83.9%）
地域コミュニティー／政策デザイン（16名）	1（6.3%）	15（93.8%）
データサイエンス／電気電子（20名・再履修クラス）	5（25.0%）	15（75.0%）

## 3. 機械翻訳の精度をどのくらい信頼していたか。

前年度は、クラスによって、意見が別れる結果であったが、本結果は、「ややあった」がほとんどで、「とてもあった」は少数に留まり、「まったくない」はゼロであった。ほとんどの学生が信頼していたという結果であるが、「とてもあった」が全体でも10人だけというのは予想よりも低い数字であった。

【表3】 機械翻訳の精度をどのくらい信頼していたか。

	とてもあった	ややあった	どちらともいえない	あまりない	まったくない
2年生（大）	8（21.6%）	13（35.1%）	11（29.7%）	5（13.5%）	0
2年生（小）	0	0	3（50.0%）	3（50.0%）	0

クラス	とてもあった	ややあった	あまりない	まったくない
経営／工学（31名）	6（19.4%）	25（80.6%）	0	0
地域コミュニティー／政策デザイン（16名）	4（25.0%）	11（68.8%）	1（6.3%）	0
データサイエンス／電気電子（20名・再履修クラス）	0	18（90.0%）	2（10.0%）	0

#### 4. 機械翻訳の精度について考えが変わったか。

「変わらない」「信頼が減った」で全体の9割以上を占めた。「変わらない」と回答した学生は、活動を通して“MTは便利だが完璧ではない”という確信を持つようになったと考えられる。前年度は、「信頼が減った」が多数で、「変わらない」は少数であったが、いずれの場合においても、つまりは、多くの学生がMT実験を経てMTが完璧ではないことを実感したことを示している。前年度も同じ結果であったことから、MTへの過信を防ぎ、本活動の教育的効果が確認された。

【表4】 機械翻訳の精度について考えが変わったか。

	大変変わった	少し変わった	あまり変わらない	全然変わらない	どちらでもない
2年生(大)	10 (27.0%)	19 (51.4%)	7 (18.9%)	0	1 (2.7%)
2年生(小)	3 (50.0%)	2 (33.3%)	1 (16.7%)	0	0

クラス	信頼が増した	信頼が減った	変らない
経営/工学 (31名)	1 ( 3.2%)	19 (61.3%)	11 (35.5%)
地域コミュニティー/政策デザイン (16名)	3 (18.8%)	6 (37.5%)	7 (43.8%)
データサイエンス/電気電子 (20名・再履修クラス)	1 ( 5.0%)	9 (45.0%)	10 (50.0%)

#### 5. どの程度、自分で修正したか。

「40～60%」「10～30%」が多くを占めた。語彙・表現レベルでの修正が中心で、文法的修正(時制・主語一致など)は減少していた。前年よりも単複数の誤りが減ったのは、教師のフィードバック共有の影響と考えられる。前年度と同じテーマ(アルバイト、冬休み)でありながら、前年よりも単複数の誤りが減ったのは、教師のフィードバック共有の影響と考えられる。

さらに、前年度と同様に自己修正が困難で教師の介入が必要な学生も一定数見られた。このことから、MT活動の成功には教師の介入と支援が不可欠であることが示唆される。

【表5】 どの程度、自分で修正したか。

	70-100%	40-60%	10-30%	0%
2年生(大)	2 (5.4%)	20 (54.1%)	15 (40.5%)	0
2年生(小)	0	3 (50.0%)	3 (50.0%)	0

クラス	70-100%	40-60%	10-30%	0%
経営／工学 (31名)	2 ( 6.5%)	14 (45.2%)	11 (35.5%)	4 (12.9%)
地域コミュニティー／政策デザイン (16名)	2 (12.5%)	9 (56.3%)	5 (31.3%)	0
データサイエンス／電気電子 (20名・再履修クラス)	1 ( 5.0%)	9 (45.0%)	9 (45.0%)	1 ( 5.0%)

## 6. 機械翻訳を使うことは英語力の向上を妨げると思うか。

「妨げない」が多数を占めた。理由として「修正過程での学びがあった」「使い方次第で学習に役立つ」といった肯定的意見が多かった。一方で、「単語を覚えなくなる」「自分で考えなくなる」といった学習意欲の低下を懸念する意見もみられた。これらの結果から、MTを学習支援ツールとして適切に位置づけるためには、教師の継続的な介入が鍵となることが再確認された。

【表6】 機械翻訳を使うことは英語力の向上を妨げると思うか。

	とてもそう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまり思わない	まったく思わない
2年生 (大)	1 (2.7%)	10 (27.0%)	5 (13.5%)	18 (48.6%)	3 ( 8.1%)
2年生 (小)	0	2 (33.3%)	1 (16.7%)	2 (33.3%)	1 (16.7%)

クラス	妨げる	妨げない
経営／工学 (31名)	3 ( 9.7%)	28 (90.3%)
地域コミュニティー／政策デザイン (16名)	2 (12.5%)	14 (87.5%)
データサイエンス／電気電子 (20名・再履修クラス)	6 (30.0%)	14 (70.0%)

## 7. 今回のMT実験に学びがあったか。

全員が「はい」と回答した。MTの不完全さを理解し、自ら確認する姿勢が育ったとする意見や、「MTを通して語彙や文法を学べた」といった肯定的なコメントが目立った。

また、全体フィードバックに対しては「他者の誤りから学べた」「内容の違いが面白かった」との意見が多く、集合的学習の効果が示された。今後は、時間制約を補うため、スライド共有に加えてプリント配布による学びの拡充を検討したい。

【表7】 今回のMT活動に学びがあったか。

	とても思う	やや思う	どちらともいえない	あまり思わない	まったく思わない
2年生（大）	24（64.9%）	13（35.1%）	0	0	0
2年生（小）	4（66.7%）	2（33.3%）	0	0	0

クラス	あった	なかった
経営／工学（31名）	100%	0
地域コミュニティー／政策デザイン（16名）	100%	0
データサイエンス／電気電子（20名・再履修クラス）	100%	0

## 8. 今後、どの程度機械翻訳を使うか。

「使わない」が1名のみで、他はすべて「今後も使う」と回答した。前年も同様の結果であり、MTの継続的活用が定着しつつあることがうかがえる。

【表8】 今後、どの程度機械翻訳を使いますか。

	毎回	頻繁に	時々	絶対使わない
2年生（大）	2（5.4%）	25（67.6%）	10（27.0%）	0
2年生（小）	0	4（66.7%）	2（33.3%）	0

クラス	毎回	頻繁に	時々	使わない
経営／工学（31名）	1（3.2%）	14（45.2%）	16（51.6%）	0
地域コミュニティー／政策デザイン（16名）	1（6.3%）	7（43.8%）	8（50.0%）	0
データサイエンス／電気電子（20名・再履修クラス）	0	10（50.0%）	9（45.0%）	1（5.0%）

## 5.2 スピーチ大会後のアンケート結果

スピーチ大会終了後に実施したアンケート結果からは、MT活動がスピーチ大会の原稿作成に非常に効果的であったことが示された。

まず、MT活動がスピーチ原稿作成に役立ったかについては、全員が「はい」と回答しており、学生は自分の英作文を機械翻訳で確認する過程で、誤りや改善点に気づくことができたと報告している。また、MTや生成AIの授業での活用経験については、「Google翻訳」「DeepL翻訳」「weblio翻訳」などの機械翻訳ツールの利用が主であり、ChatGPTなどの生成AIはまだ一部の学生に限られていたが、今後の学習に活かせるツールとして期待されていることが分かった。

さらに、学生の多くは、MTやAIの登場が英語学習や教育に影響を与えると認識しており、授業内での活用方法を学びたいとの意欲も高かった。「AIと共存する時代において、上手な活用法を知ることが必要」との意見や、「授業でChatGPTの使い方を学べて良かった」との声も多数あった。中には、「ChatGPTとの英会話動画を課題にする」「AIとのロールプレイ活動」などの授業活動への提案、「AI使用の注意点」「AI使用のコツ」などの要望も挙がるなど、実用的な学びへの関心が高いことがうかがえる。

以上の結果から、スピーチ大会の原稿作成に合わせてMT活動を実施することは、学習効果の最大化と学生の学習意欲向上に非常に有効であることが示された。具体的な割合や詳細は表9を参照されたい。

【表9】 今後、どの程度機械翻訳を使いますか。

質問	回答（回答者73名）
1. 今回のMT実験は、スピーチ大会の原稿作成に活かされたか	「はい」 95.9% 「いいえ」 4.1%
2. これまでの英語の授業で、MTや生成AIを利用していたか／ツール名	「はい」 87.7% 「いいえ」 13.3% 「Google翻訳」 52.5% 「DeepL翻訳」 27.4% 「ChatGPT」 21.9% 「Gemini」 4.1%
3. 今回のスピーチ原稿に、何のツールを使ったか	「Google翻訳」 38.4% 「DeepL翻訳」 32.9% 「ChatGPT」 21.9% 「Gemini」 4.1%
4. 英語自主学习でChatGPTを使ったことがあるか	「はい」 61.6% 「いいえ」 38.4%
5. MTやAIの登場は英語教育に影響を与えるか	「はい」 91.8% 「いいえ」 8.2%
6. MTやAIなどの活用方法を授業で教えるべきか	「はい」 97.3% 「いいえ」 2.7%

【表10】 機械翻訳は外国人との会話にも役立つと思いますか。

	とてもそう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまり思わない	まったく思わない
2年生（大）	14 (37.8%)	17 (45.9%)	5 (13.5%)	1 ( 2.7%)	0
2年生（小）	1 (16.7%)	2 (33.3%)	1 (16.7%)	2 (33.3%)	0

## 6. まとめ

本活動は、1分間スピーチ大会に向けたスピーチ原稿作成を目的として、機械翻訳（Machine Translation: MT）を活用するものである。特に本活動では、日本語をそのままMTにかけるだけでなく、まず学生自身に自力で英文を作成させることを重視している。このプロセスに

より、学生は自分の英文がMTによってどのように日本語に訳されるのか、またどの部分が誤訳されやすいかを自ら体感することができる。さらに、MTの翻訳結果を参考にしながら英文を修正することで、語彙や表現の選択、文法の確認など、自分の英語力を客観的に検証する学習が可能となる。

活動期間は2024年度後期の7～8週目で、対象クラスは2年生3クラス（dレベル）である。1コマ目ではなぜMTを授業で取り扱うのかを説明した上で、MTと併用すると効果的な学習補助ツール（オンライン辞書アプリ、オンライン英会話サイト、Google USA/UK、Grammarlyなど）を紹介した後、実際にMTを用いた英作文を2つの方法で作成させた。

1つ目は、自力で英文を作成し、それをMTにかけて日本語訳を確認し、必要に応じて修正する方法である。修正には学習補助ツールも併用し、MTの翻訳精度を検証しながら最終版を完成させる。2つ目は、日本語の文章を作成し、それをMTに直接翻訳させた上で、必要に応じて修正する方法である。いずれの方法でも、最終版に至るまでの過程や学びをレポートにまとめさせ、修正箇所には下線を引くよう指示した。

レポートの評価は、完成した英文の正確さよりも、学習過程での気づきや修正の工夫を重視した。翌週には、学生の提出物から共通する間違いや興味深い修正事例をPPTにまとめ、全体フィードバックを行った。また、MTの弱点や効果的な使い方について再講義を行い、事後アンケートを実施した。

本活動をスピーチ大会の原稿作成時期に合わせて実施することには大きな効果がある。前年度は14～15週目にMT実験を行ったところ、学生の中にはMTの訳文をほぼそのまま使用し、発音できない語彙や主語の混同などが散見された。しかし、大会原稿作成と組み合わせることで、「聞き手に伝わる英文を作る」という目的意識が明確になり、MTの活用が実際のスピーチパフォーマンス向上につながった。

一方で、1年生など基礎知識が不十分な段階での導入にはリスクがある。自力で英文を作る力が十分でない場合、MTに頼りすぎて学習意欲が低下したり、誤用を正しく修正できず学習効果が薄れるなどといった可能性がある。したがって、MT活動はスピーチ大会の原稿作成と連動させ、基礎力を習得した2年生以降の段階で導入することが望ましい。

## 参考文献

- 小田登志子 (2019)「機械翻訳と共存する外国語学習活動とは」『人文自然科学論集145号』東京経済大学人文自然科学研究会、pp3-27.
- 小田登志子 (2021)「機械翻訳が一般教養英語に与える影響に対応するには」『人文自然科学論集149号』東京経済大学人文自然科学研究会、pp3-27.

## 英語授業におけるスピーチ原稿作成への機械翻訳活用の実践報告

小田登志子 (2022) 「機械翻訳時代に学習者が意味を見いだす大学教養英語教育とは」『人文自然科学論集151号』東京経済大学人文自然科学研究会、pp4-9.

小田登志子 (2024) 「生成AIにより一般教養英語はより実用志向へ」『人文自然科学論集155号』東京経済大学人文自然科学研究会、pp3-26.

近藤雪絵ほか (2025) 「大学英語教育における機械翻訳と生成AIの活用事例：発信力向上に焦点を当てて」『電子情報通信学会2025』通信ソサイエティマガジン No.72、pp.331-339.

山田、小田ほか (2023) 『英語教育と機械翻訳』金星堂

山田優 (2021) 「日本の大学における教養英語教育と機械翻訳に関する予備的調査」MITIS Journal, 2 (1) , pp55-66

山田優 (2020) 『自動翻訳大全』三オブックス

柳瀬陽介 (2023) 「<実践報告>大学教養・共通教育における機械翻訳活用型英語ライティング授業の成功のための諸要因 - 制度・言語能力・原理的理解・教材・フィードバックの5つの観点から - 」『京都大学国際高等教育院紀要第6巻』京都大学国際高等教育院、pp19-50.

弥永啓子 (2022) 「日本人大学生の機械翻訳使用の実態調査と今後の英語教育への導入に関する考察」『京都橘大学研究紀要48号』京都橘大学、pp1-19.



